# 塚谷周次先生を送ることば

女子短期大学部長　工藤利彦

本学、女子短期大学部英文学科教授の塚谷周次先生が、平成22年3月末日をもって、惜しまれながらもご退職になられます。

塚谷先生は昭和15年3月15日に北海道中川郡本別町にてお生まれになりました。昭和40年3月に北海道大学文学部国文学科を卒業され、引き続き北海道大学大学院文学研究科修士課程へ進学されて昭和44年3月に同課程修了、さらに同年4月より同大学院文学研究科博士課程へと進まれ、昭和48年3月に同課程を単位取得満期退学されました。昭和48年4月より北海道自動車短期大学に講師として赴任され、昭和49年4月からは同大学助教授に昇任され、昭和52年3月までお勤めになられました。

本学へは、女子短期大学部国文学科の学生収容定員増に伴う教員人事により、昭和52年4月に同学科助教授として赴任され、平成3年4月には同学科教授に就任されました。平成9年4月の文化学部開設に伴って、それまで英文学科、国文学科、文化学科、経営学科の4学科構成だった女子短期大学部は、現在につながる2学科体制（英文学科と経営学科2専攻、後に2専攻は廃止）となりました。その際に、塚谷先生は国文学科から移籍されて英文学科の所属教員となられました。以来、英文学科では専門科目「日本文学概論」、「日本語文章論」、また共通科目では「文学Ⅰ・Ⅱ」「日本文化入門」などの科目を担当され、学生の教育・指導に当たって来られました。

塚谷先生は、これまでに学内の各種委員会委員の職務を始めとして、女子短期大学部長（平成13年4月から12月まで）、また、学校法人札幌大学の理事・評議員（平成3年11月から平成9年3月まで、及び平成15年4月から平成19年3月まで）などの重責を担い、女子短期大学部のみならず札幌大学全体の運営、学内行政に多大な貢献をされて来られました。特に平成3年からの理事就任では、文化学部開

設のために大変なご苦労をなさいました。女子短期大学部は昭和48年の開設以来、昭和52年の学生収容定員増、昭和57年の文化学科・経営学科の新学科増設、さらに昭和61年の全学科での臨時定員増と、大きな学生数を引き受けて札幌大学全体の財政に大きく貢献してきました。その一方で、全国的な大学進学率の上昇及び女子の高学歴化の進行という社会状況の変化、やがて確実に到来する18歳人口の減少及びその長期化という事態を見込んで、短期大学部の転換改組による学部発展計画の議論が昭和60年頃から進んでいきました。その計画はやがて全学的承認を経て、平成7年から新学部開設準備室が実際にスタートし、平成9年4月の文化学部開設として結実しました。この一連の動きの中で、塚谷先生は学部内構想の段階から発展計画に参画し、準備室設置後は文化学部開設の実質的な作業責任者として、法人理事の立場でさまざまな困難を伴う学部開設の準備業務を遂行されました。

実は塚谷先生の平成3年の教授就任も、理事として学部開設の準備に当たる人材を短期大学部から出す必要があるとの観点から、元来職位などには執着がなかった塚谷先生に、周囲が無理にお願いして昇任していただいたのだと聞いたことがございます。短期大学部内の当初計画では英文、国文、経営、文化の4学科すべてが転換改組によって移行できる新学部を構想していたのですが、学内的要素がさまざまと絡み、結局、国文学科と文化学科の学生定員を基礎として、全国で初めての文化学部が開設される運びとなりました。文化学部開設時に国文学科と文化学科に所属する教員がほとんど新学部に移籍された中で、塚谷先生ご自身は短期大学部に残留されました。これも短期大学部の視点から発展計画を考えれば、仕事はまだ半ばだという意識が先生の中に強くあったからではないかと推察いたしております。従って、平成15年に再度学内理事に就任されたのも、残る短期大学部2学科を発展的に転換改組することで、いわゆる「短大問題」を完全に解決するためであったと理解しております。

しかし、再度の理事就任時には、就任間もなく本学全体を揺るがし

た「留学生の不法就労事件」が発生し、広報担当理事として塚谷先生は、マスコミからの容赦ない質問の矢面に立ちながらも、本学のダメージを最小限にすべく誠心誠意をもって報道対応に当たられました。事件の落着後、あらためて「短大問題」の解決に積極的に取り組まれたのですが、札幌大学を取り巻く環境は事件の後遺症もあってか急激に変化し、学内には大胆な発展構想を受け入れる気持ちの余裕が無くなり、塚谷先生が考案された斬新な計画も日の目を見ることができないまま、短期大学部2学科は存続し現在に至っている次第です。勝手な想像ながら、塚谷先生が大学を去られるに当たっての心残りがあるとすれば、「短大問題」そして大学全体の将来についての心配がその中で大きな割合を占めているのではないかと考えております。もしそうであるならば、後進の我々としては、先生のお気持ちを受け継ぎ、立派な札幌大学の将来像が提示できるように、一丸となって頑張って行かなければならないと強く感じております。

学内で大事業、重責を果たされてきた一方で、塚谷先生はこれまでに昭和60年の京都大学での国内留学研修、そして平成元年秋からのインドネシア大学文学部日本学科へ招聘教授としての一年間のジャカルタ赴任、平成10年にはロンドン大学アジア・アフリカ・中東研究所の客員研究員としてイギリスに一年間の滞在をご経験されておられます。京都での研修では、学術的成果とは別に、ガイドブックが十分替けると豪語なさるほどまでに京都の街には詳しくなられたようです。先生からは名所や京菓子、京漬け物の老舗などを幾つか実際に紹介していただいたことがございます。またインドネシア、ジャカルタでは現地の住まいには召使いや運転手が居たなどと、熱帯の暑さを除くと夢のような暮らしぶりの一年間だったという話をお聞きして、とても羨ましく思ったものです。ロンドン滞在時にはかの伝統あるセビル・ロウ街の洋服屋に何回も脚を運びスーツをお作りになった話などをお聞きしております。本学教職員の中でトップクラスのベストドレッサーであろうことは日頃から衆目の一致するところです。塚谷先生がロンドン滞在時に専門店で何本かお求めになったというステッキ

は、私たちが先生のお姿をイメージする際には今や欠かせない必須要素となっております。個人的には、英文学科の海外研修引率中、松田先生と一緒に塚谷先生のロンドンのお住まいにお邪魔した事、後から経営学科の眞瀬先生もロンドン入りし、英文学科の研修学生と一緒にクリスマス時期のパリを巡ったことなどが、懐かしく思い出されます。

塚谷先生のご専門は国文学の中でも近代文学だと従来お聞きしていたのですが、最近ここ何年間か、先生は安土・桃山から江戸初期にかけて歴史に足跡を残しているキリシタンだったある人物に興味を持たれ、新たな研究対象にしていらっしゃいました。その人物の足跡をたどって何度も東北地方各地を現地調査され、また関連調査として離島を含めた九州地方一円の現地調査も複数回実施しておられます。昨年末にもキリスト教が初めて本土上陸した土地である鹿児島の現地調査に出かけられるなど、ますます精力的に調査研究を進めておられます。先生は文学研究者であるのみならず、一方で文学作品を制作する立場になろうという気持ちもお持ちだとのことですので、塚谷先生の一連の調査研究の成果が、今後いかなる形で世に出てくるのか今からとても楽しみにしております。塚谷先生はとても行動的で気持ちもお若いので、大学という場は離れるにしても i-Phone やM ac パソコンなどファッショナブルな機器を駆使し、引き続き新しい環境で、素敵な研究スタイルを貫かれるものと信じております。

塚谷先生は長い間、大学人としての良識とは何かを理解する教員の本学における中心的存在であり、また短期大学部においては大事な場面で司令塔の役目をしていただける存在でした。塚谷先生がご退職になって、これからは教授会や会議などの場で、静かな話しぶりの中にも重みがあり説得力のある先生の発言やアドバイスを伺うことができなくなるのかと思うと、本当に寂しく心細い限りです。しかし、我々女子短期大学部教員一同は寂しさを振り切って先生の新しい門出を笑顔でお祝いしたいと思います。

最後に、長年にわたり女子短期大学部に多大なるご尽力を賜りまし

たことに対し、改めて感謝申し上げるとともに、塚谷周次先生のご健康とご多幸を心から祈念して、送別の辞とさせていただきます。